伝説の勇者（笑）

ニジカン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伝説の勇者（笑）

【Ｎコード】
Ｎ５５８０Ｎ

【作者名】
ニジカン

【あらすじ】
突然、魔法とモンスターが存在する世界に飛ばされてしまった少年タカシ。
タカシはそこで伝説の勇者と言われ、世界を滅ぼそうとする魔王を倒す旅に出る。
果たしてタカシは友達の家に着くことができるのか！？
壮大なスペクタクルでお送りする伝説的ファンタジーストーリー（笑）！！！

※全5話のサクサクストーリーです

予告編（前書き）

初投稿。適当。すごい適当。何が適当ってすごい適当。

予告編

広大な自然、澄み切った空、そして奇怪な生物たち。
見たこともないような光景が広がっているそこは私たちが知る世界ではなかった。
そう、ここは魔法が存在し、モンスターが存在する私たちが住んでいるのとは全く別の世界。
そしてその世界は今、魔王の手によって破滅の危機に瀕してしてした。
そんな世界に突然飛ばされてきてしまった一人の少年。
彼は一体何を思うのか・・・

少年『マサヒロの家はどっちだ?』

夏の終わりに壮大なスペクタクルでお送りする伝説的ファンタジーストーリー!!!

「聖龍斬！！」

「こいつらはキャティル系の魔法が弱点なのよ。」

「はあああああああ！！！」

「お前のズボンに書いてあるＥＤＷＩＮの文字がその証拠だ。」

果たして、伝説の勇者（笑）はこの世界を救うことができるのか！？

伝説の勇者（笑）ｃｏｍｉｎｇ　ｓｏｏｎ

仲間が窮地に陥ったとき、少年は何を思うか・・・

少年『なんか大変そうだなー。』

第壱の伝説

目の前に広がる広大な自然、澄み切った空、見たこともないような植物、何のものともわからない鳴き声・・・、それらに囲まれ少年は立ち尽くしていた。

彼の名前はタカシ。神奈川県在住の県立高校に通う普通の高校生で、友達であるマサヒロの家に行く途中、自転車を降り信号待ちをしていたところだ。

しかしそこに待っていたはずの信号機はなく、乗っていたはずの自転車はない。

握っていたハンドルが急になくなったため、彼はなんだか情けないポーズをとったまましばらく周りの風景を眺めていた。

どう考えても神奈川には存在しないであろう景色を見て彼が思ったことはひとつ。

『どうやってマサヒロの家に行こうか。』

タカシはこんな状況でも友達との約束に遅れないようにすることを考えるような普通の人間だったためほとんど動揺することがなかった。

そのとき、突然草むらから一匹の動物が躍り出て来た。

動物というか獣、獣というかモンスター。

目の前に出てきたそれはゲームや何かで見るようなモンスターそのものだった。

「グオオオォォォォォ！！！」

と、いかにもモンスターらしい雄叫びを上げながら猛烈に突っ込んでくるモンスター。

そのとき、

「聖龍斬！！」

と、いう声が聞こえたかと思うとそのモンスターは真っ二つに裂け凄まじい断末魔とともに倒れてしまった。

「君、大丈夫か！？」

タカシはその声がするほうを見た。

そこにはこれまたゲームで見るようなマントを羽織り、剣を持った男が立っていた。

「あまりの恐怖で動けなかったのか？でももう大丈夫だ。」

と優しく話しかける男。

だが実際はタカシが普通の人間であったため、

『これ見たことない動物だからきっと作り物とかなんかだろ。』

『あれ？これほんとに生きてたの？なんだ危なかったのか。まあ結果的に俺生きてるからいっか。』

と、考えていたから動かなかっただけなのだ。

「私の名前はメキア。魔王討伐のために旅をしている者だ。君は？」

「タカシです。どうも。」

タカシは華麗にスルーした。

「タカシはなんというか、変わった格好をしているな。」

ＲＰＧキャラのコスプレのような格好の男に言われたくはない。

「なあ、ここどこなんだ？」

タカシにとって格好は興味の対象ではなかった。

「ここか？ここはリズレグラスト、私の祖国アントノーレッジより遥か東の地であるが、用あってここまで来たのだよ。」

「横浜はどこの方角ですか？友達ん家行きたいんだけど。」

タカシは話を聞いていないのか。ここに来てもなお現状を把握していないようだった。

「ヨコハマ？聞いたこともない名前だな。」

だろうな。

「もしやタカシは・・・異世界から来た人間なのか！？」

結局メキアのほうがはやく気付いた。

「ん、うん。」

タカシは理解したからうんと答えたのではない。めんどくさいからうんと答えたのだ。

「異世界から来た少年・・・これはもしや古くから伝えられる伝説の勇者、アルケミシアなのかも知れない！」

いかにも勇者っぽい格好で何を言うか。

一人で盛り上がるメキア。とりあえずどっちが北なのかだけでも

知りたいタカシ。

「こうして出会ったのも何かの縁だ。私と一緒にグラハイム王のところまで来てきれないか？タカシ。」

「ああ、いいけど。」

『そいつならこいつより地理に詳しいかもなー。』

タカシは普通の人間であったため、いまだにここが日本、いや、神奈川だと信じて疑わなかった。

こうしてタカシはなりゆきでメキアに同行することになった。マサヒロの家の方角を聞くために。

第壱の伝説（後書き）

ジャンル悩みました。
一見ファンタジーです。
でも読んでいくとコメディーです。
つまりファンタジーコメディーです。

いえ、ファンタジーパロディーです。
・・・、じゃあ二次創作なのかな？

第弐の伝説

神奈川県在住の普通の高校生、タカシはどうやら伝説の勇者らしい。

タカシはなりゆきでメキアというコスプレ男に連れられグラハイム王なる人に会いに行くことになった。

その道中も動物、いや、モンスターがうじゃうじゃ現れ、そのたびにメキアが

「聖龍斬！！」

と叫びながら切っていった。

タカシは普通の人間であったため、

『ああ、こいつは剣を振るときいちいち聖龍斬と言わないといけない病気なんだな。かわいそうに。』

と、理解した。

メキアはどうやらもの凄く強いらしく、どんな奇怪な姿をしたモンスターでも最終的に聖龍斬！と言ってしまえばたちまち肉塊に変えることが出来た。

しかしなぜか最初から聖龍斬！と叫ぶことはなく、しかも聖龍斬！と叫ぶたびに疲れているようにも見えた。

が、傍目にはいちいち聖龍斬！と叫ぶから疲れているようにしか見えないから困る。そうでなくとも無言ではできないのか。

そしてその疲労がついにピークに達したのか、三体のモンスターを前に片膝をつき座り込んでしまった。

説明するまでもないがタカシにはモンスターと戦う術も、戦う気もないのでメキアが倒れたらどうしようもない。

「くそう・・・ここまでなのか・・・」

メキアが悔しそうにつぶやく。

『なんかすごく大変そうだな。』

完全に他人事のタカシ。

「グオオオォォォォォ！！！」

やられる！と思ったその時！

「キャティアエクセクト！！」

という声とともに無数の光がモンスターたちを貫き、あっという間に全滅させてしまった。

「だ！誰だ！」

叫ぶメキア。

すると、空から舞い降りてきたのはなんと女だった。

「まったく、ここのモンスター相手に剣だけで戦うなんて。こい

つらはキャティル系の魔法が弱点なのよ。」

そう自慢げに説明する女。

「何！？」

その言葉に憤るメキア。

『こんどはキュアなんとか病か。』

話を聞いていないタカシ。

すると女はタカシの存在に気付く。

驚いた様子でタカシを暫く見つめた後、

「パウローーーー！！！」

と言ってタカシに思いっきり抱きついた。

女は長く綺麗な金色の髪を持ち、豊満な胸を湛え、整った顔立ちをし、見事なプロポーションをした美しい女性であった。

が、メキアのものとはデザインが違うがやはりコスプレにありそうな甲冑みたいなものを付けている上、力がタカシに比べ幾分強いためそこに憧れの嬉しい感触はなく、タカシの体はメシメシと音を立てた。

「いたいいたいいたいいたいいたい！！！！」

タカシは頭を強く打ちつけ大量に出血しても、

『病院かー、あんまりあのにおい好きじゃないんだよなー。』

と考えるだけで特に何のリアクションもしないような普通の人間であったが、さすがにこれは痛かったらしく珍しく取り乱していた。貴重なシーンである。

「すっ、すまない！つい・・・」

開放されたタカシ。

「あんたは一体何者なんだ？タカシの知り合いなのか？」

珍しくまともなことを言うメキア。これまた貴重なシーンである。

「タカシ・・・そうか、タカシというのか・・・。」

そう言って寂しそうな目をする女。

「失礼した。私の名前はメリッサ。魔王討伐のため、グラハイム

王のお力添えを頂こうとここまで旅をしてきた。」

「なんと、同志であったとは！」

「ということはあなたたちも？」

タカシは違う。

「あの、タカシ、ごめんなさい。あなたが私の弟に似ていたものだからつい・・・。」

そう言ってメリッサは謝った。

「パウロと言ったか？その弟はもしや・・・。」

「ええ・・・殺されたわ。」

人が傷つきそうなことをさらりというメキア。

「そうか・・・。」

そして何のフォローもしないメキア。

「パウロはね、この世界を救う鍵、マナトリアの子かも知れないと言われていたのよ。でもそのせいでやつらに命を・・・。」

涙ぐむメリッサ。

立ち尽くすメキア。

『メリッサってどっかで聞いたことあるな。』

と考えているタカシ。

「タカシ。」

「あなたは私の弟、パウロに似ている。もしかしたら・・・あなたが世界を救う鍵、マナトリアなのかも知れない。」

タカシは似ているというだけで世界の重要人物にされた。

「私もあなたたちに同行させてもらってもいいかしら？」

「もちろんだ！なあ？」

「うん。」

タカシは話を聞いていたからうんと答えたのではない。めんどくさいからうんと答えたのだ。

こうしてメキア、メリッサ、タカシの三人はグラハイム王のところへ行くことになった。しかしタカシはもうその目的がわからなくなっているが。

第弐の伝説（後書き）

表現方法迷走中。
スキマなしＶｅｒを自分のサイトに載せてます。そっちのほうが読みやすい人はどうぞ。

＼少女臭／

第参の伝説

神奈川県在住の普通の高校生、タカシはどうやら伝説の勇者であり、世界を救う鍵らしい。

タカシはメキア、メリッサというコスプレをした男女と共にグラハイムという国に到着した。

さっそくそのお城に通され、あっさり王様のところまで着いた。この国のセキュリティは果して大丈夫なのか。

メキア、メリッサは王様に敬意を表した喋り方で何か難しいことを話している。

タカシはというと、

『そもそもなんで片膝つきながら話してるんだろうか。立つか座るかはっきりしたほうがいいだろ。』

などと考えながら同じく片膝をついた状態で大人しくしていた。ぼーっとしていたとも言う。当然話は聞いていない。

「そうか・・・。ところで、タカシ、といったか？」

急に王様の話題がタカシになった。

「はあ。」

清々しいほどの生返事である。

「そなたには皆にはない何か凄い力を感じる。」

多分気のせいである。

「おい！」

王様がそう言うと、奥から黒いフード付きのローブを着た怪しい男が出てきた。

「このタカシという男を占ってみよ。」

「は！」

そう言うと男は用意された水晶玉のようなものを使い、もの凄く力み始めた。そして、

「はあああああああ！！！」

と大きく声をあげた。一体何がしたかったのか。

「わかりました。」

何が？

「私の占いによれば、この者こそが天空の導き人、アイセグラム・ナ・セベスケート・ゼラ・マ・ルヴィアンテ・ルミナル・ラパトーテ・アキナスであると！」

どうでもいいがその長ったらしい名前はどうにかならないのか。

「なんと！やはりそうであったか！」

なにがやはりなのか。

「メキア、メリッサ、そしてタカシ。お前達には魔王討伐を命じる。我がグラハイムも可能限りお前達に力添えをしようぞ！」

「はっ！」

「はっ！」

「うん。」

タカシは魔王を倒す気があるからうんと答えたのではない。めんどくさいからうんと答えたのだ。

そもそも王様に対しこんなに失礼な態度をとり続けているのに一向に注意されない。そういう意味ではタカシは凄い力を持っているのかも知れない。

「今日はゆっくり鋭気を養い、明日に備えるがよい。」

そして三人はそれぞれスイートルーム的な部屋に案内された。この辺はさすが国王といったところか。

その夜、三人は一つの部屋に集まっていた。

「・・・と、いう経路になる。二人ともいいか？」

「ええ。わかったわ。」

「うん。」

「しかし、グラハイム王はタカシが天空の導き人、アイセグラム・ナ・セベスケート・ゼラ・マ・ルヴィアンテ・ルミナル・ラパトーテ・アキナスであると言っていたが、やはり私は伝説の勇者、アルケミシアだと思うのだがな。」

メキアは不服そうに言った。その前によくそんな長ったらしい名前を噛まずに完璧に言えるものだ。

「何言ってるの！タカシは世界を救う鍵、マナトリアよ！」

「いいやアルケミシアだ！」

「マナトリア！」

「アルケミシア！」

恐らくどちらも間違っている。

だがなぜかそんな不毛な話題で喧嘩に発展してしまった。

そもそも出会ったときの印象がああだったため、二人はあまり仲が良くはない。この城に着くまでも随分言い合いがあった。

が、今回はなぜか無関係なタカシが巻き込まれている。非常に迷惑な話だが、当の本人は普通の人間であったため、

『この際だからその魔王って奴に道聞こう。』

などと考えていた。迷惑はしていないようだが無関係であることは確かなようだ。

タカシはやっと二人が言い争っていることに気が付いたようだ。しかし二人が誰のせいで言い争いになったのかいまいち理解してないらしい。

「まあ、魔王のところまで行けば答えがわかるんじゃない？」

かなりとりあえずななだめ方をするタカシ。

「・・・そうだな。」

「・・・ごめんなさい。」

やはり、こういう意味ではタカシは凄い力を持っているのかも知れない。

こうして夜は更けていった。

そしていよいよ、本格的に魔王討伐の旅が始まった。ただしタカシは魔王に道を聞くのが目的だが。

第参の伝説（後書き）

更新は不定期です。気分しだいです。
展開は早いです。長くするつもりありません。
内容はご覧の通りです。どうぞ罵ってください。

別に興奮はしませんよ？

第肆の伝説

神奈川県在住の普通の高校生、タカシはどうやら伝説の勇者であり、世界を救う鍵であり、天空の導き人らしい。

タカシはメキア、メリッサらとともに魔王とかいうなんかよくわからないやつを理由もわからず倒しに行くことになった。

出発の日、三人は王様に呼び出された。

王様は一人の男を紹介した。

「この者もお前たちと同じく魔王を倒さんとする勇者だ。」

「俺の名前はハセダバ。そこそこ腕には自信があるから迷惑はかけないつもりだ。俺も同行させてくれ。」

メキア、メリッサはいかにも戦士のような格好であるのに対し、ハセダバは一般市民のようなみすぼらしい格好をしている。

だが、その話し方からはかなりの自信と信頼性のなさが伺えた。

「仲間は多いほうがいい。ともに魔王を討とう。」

「ええ。」

「うん。」

こうしてパーティーにハセダバが加わった。

グラハイムを出発しようとするとき、一人の幼女がタカシに駆け寄りネックレスを渡す。

「これは何かしら？」

ノーリアクションのタカシの代わりに優しい口調で幼女に尋ねるメリッサ。

「これはね、死んだおばあちゃんがね、まおうを倒してくれる最強の戦士、マケハシナイナに渡しなさいって言ってたんだよ。だからお兄ちゃんにあげるね。」

去り際にとんでもないプレッシャーの塊を託されたタカシであった。

そうして彼らは魔王の城へ向かう旅に出た。

グラハイムを出て間もなく、

「ふふ、お前ら聞いてくれ。すごいことを教えてやろう。」

とハセダバが言い出した。

「何だ？」

「何？」

タカシは話を聞く気がない。

「そこのタカシは異世界から来た人間なんだろ？実は俺もそうな

んだよ！」

かなり自慢げに話すハセダバ。

「そっ！そうなのかっ！？」

素直に驚くメキア。

「でも待って。あなた本当に異世界人？何か証拠はないの？」

冷静なメリッサ。だがそれをいうならタカシが異世界人である証拠もまだないのだが。

「しょ、証拠？え、ええっと・・・そうだ！俺らの世界ではグランペのスープが人気なんだよ！な！？タカシ！？」

そもそもグランペがなんなのかわからないのに同意を求められても困る。

どうやらこの男、異世界人というのは真っ赤な嘘で、どうも伝説の勇者という肩書きにあやかりたいだけらしい。

恐らくハセダバとかいう名前も長谷川からもじったか、聞き間違えたのをそのまま付けたお粗末な偽名だろう。

しかし長谷川という苗字を知っているあたり異世界を全く知らないわけではないようなので、まあさしずめ異世界マニアといったところだろう。

話が戻って、この異世界マニア、嘘がばれるのが嫌で目線で必死にタカシに同意を訴えている。タカシの返事は、

「うん。」

タカシは話を合わせたからうんと答えたのではない。めんどくさいからうんと答えたのだ。

「ということは本当なのか！」

「ちょっと信じられないけど、タカシが言うなら間違いないわね。」

このタカシに対する絶大な信頼感は一体なんなのか。

「な！？だから俺は異世界人なんだよ！」

と焦りを見せながらもそれを隠すように得意げに話すハセダバ。

一応納得した二人がこちらを見てないのを確認してタカシに近づき、

「ありがとな。」

と言うハセダバ。

タカシは普通の人間であったため、

『話聞いてもらってありがとうとか、普段はそんなに人に話を聞

いてもらえないのか。さみしいやつだ。』

と、解釈した。

旅は続く。

道中には今まで以上に多くのモンスターが出たが、各々の活躍によりさほど問題なく道を進むことができた。

聖龍斬以外の剣術も見せるメキア。

多様で強力な魔法を扱うメリッサ。

口だけでなく実際に戦力として優秀なハセバダ。

落ちていたいいかんじの棒を拾うタカシ。

夜、メキアとメリッサが寝静まったのを見てハセダバはタカシに話しかけてきた。

「お前、王様には天空の導き人、アイセグラム・ナ・セベスケート・ゼラ・マ・ルヴィアンテ・ルミナル・ラパトーテ・アキナスとか言われていたが、俺は違うと踏んでいるんだ。」

ここの世界の住人はどうしてこうも記憶力と滑舌がいいのか。

「お前は奇跡の大賢者、ポコリンだ！間違いない！」

そんな歩く公開処刑のような名前は嫌だ。

「どうしてそう思うかって？」

聞いてない。

「ふっふっふ。それはな、お前のズボンに書いてあるＥＤＷＩＮの文字がその証拠だ。」

それはジーパンのブランド名だ。

それはお前の欲しがっていた異世界人である証拠であって、ポコリンである証拠ではない。

異世界人を名乗るのならせめてこれぐらいのことは知っていて欲しいものだ。

こうしてどこまでも信用ならない男、ハセダバを加え、どこまでも信用される男、タカシはいよいよ魔王討伐に向かうことになった。世界一重いネックレス付きで。

第肆の伝説（後書き）

実は次回で最終回
はやいねー
もう終わっちゃったの？
持続力ないねー

いやいや、Ｒ－１８じゃないですよ

最伍の伝説

神奈川県在住の普通の高校生、タカシはどうやら伝説の勇者であり、世界を救う鍵であり、天空の導き人であり、最強の戦士であり、奇跡の大賢者らしい。

数日間の長旅を経て、ようやく魔王の城へと辿り着いた一行。

だが逆に言うとグラハイムから魔王の城まで人の足でもたった数日間で行けてしまう距離にあるということである。よく平気なものだ。

タカシは普通の人間であったため、

『うーん、だいぶ歩いたからもう静岡に入ったのかも知れないなあ。』

と、考えていた。一体静岡をなんだと思っているのか。

「どうしたタカシ？いまさら怖気づいたのか？」

タカシに話しかけるハセダバ。

「大丈夫、俺が守ってやるよ。俺たちゃ同志だからな。な？」

ハセダバはいかにも、

『お前もほんとは異世界人じゃないんだろ？おんなじなんだろ？』

的なノリで話しかけてくる。一緒にするな。

「じゃあみんな、これが最後の戦いだ！行くぞ！」

「ええ！」

「おう！」

「うん。」

タカシは空気を読んだからうんと答えたのではない。めんどくさいからうんと答えたのだ。

さすが魔王の城というだけのことはあって、今までとは比較にならないほどの大量のモンスターが道を阻む。

それらを剣で薙ぎ払うメキア。

魔法で蹴散らすメリッサ。

道具を駆使して戦うハセダバ。

いいかんじの棒で壁をなぞりながら歩くタカシ。

一気に魔王の部屋の前まで来てしまった一行。いやさすがにこれは弱すぎではないのだろうかここのモンスターたち。グラハイムといいここといいお城は総じてセキュリティが甘いのか？

「メキア・・・行くんだな・・・？」

急にシリアスな口調で言うハセダバ。

「ああ・・・」

「あいつだけは・・・許さない！」

「今なら引き返しても間に合うわ・・・別の手段を探す時間もまだある！・・・それでも行くの？」

「ああ・・・自分の手で奴を倒さない限り・・・」

「俺の憎しみは　消えないんだ！」

きっとメキアの両親は一日一個のおむすびのみで過酷な重労働を強いられているに違いない。台詞の言い間違いがなかったのが救いだろう。

バンッ！！

勢いよく扉を開けるとそこには魔王と思われる男が玉座に座っていた。

「よく来たな。お前たちが来ることはすでにわかっていた。」

ならもっとセキュリティに気を使うべきである。

「さあ、かかってこい！人間ども！」

「いくぞ！魔王ー！」

魔王に名前はないのか？ベルゼバブとか。

いきなり三人の集中砲火を浴びる魔王。

「グアアアアアアアア！！！」

え？もう？

「まだまだだあ・・・俺の本当の姿を見せてやる！」

煙の中から出てきたのは三つ首の巨大な龍だった。

こう言ってはなんだが、まあよくある展開だ。

「みんな！怯むな！！」

そうメキアが叫び、再び三人の集中砲火を魔王に浴びせかける。

「やったか！？」

多分やってない。

「もうそんな攻撃なぞ効かんわあああああ！！！」

ほらね。

「うわあああああ！」

「きゃあああああ！」

「うおおおお！」

それぞれの首が強力な炎、冷気、電撃を吐き出し、それを食らってしまった三人。

「つ・・・、強い・・・。」

立つのもやっとのメキア。

「まさか・・・、ここまでだったなんて・・・！？」

服がボロボロのメリッサ。

「こいつに勝つ術はないのか・・・？」

もはや動けないハセダバ。

『なんかすごいことになってるねー。』

完全に他人事のタカシ。

そもそもタカシはずっと魔王の背後にいるので何が起こっても問題がない。そう、タカシは魔王に無視られていたのだ。

すると、タカシは魔王の後ろ足に目玉があることにふと気付く。

『気持ち悪っ！』

そう思ったタカシは急に魔王の足元まで走っていき、持っていたいいかんじの棒をその目に思いっきり突き立てた。

「ガッ！ウグアアアアアアアアア！！」

急に悶え苦しみだす魔王。

「今よ！」

「いけぇ！」

「俺の新しい技を見せてやる！」

メキアは渾身の力で剣を振るう。

「真・聖龍斬！！！」

「ギャアアアアァァァァァ！！！！！」

壮絶な断末魔とともに魔王は消えていった。

「や、やった！やったぞ！！」

喜びに沸く三人。

いいかんじの棒を無くしたことを少し惜しむタカシ。

「しかし、急にどうして・・・？」

「タカシ、なにかしたの？」

ハセダバとメリッサに聞かれる。

「なんか足に気持ち悪い目があったから突いてみたくなった。」

一体どこからその発想が湧いてくるのか。

「そうか、思い出したぞ！」

メキアが急に大声をあげる。

「魔王には弱点となる目が体に隠されている。しかし、それを見つけることができるのはたったの一人、と。」

だがそれは要するに魔王に戦力外と見られて背中を向けられたやつだけがその目を見つけられる、とかいうオチではないのか？

この世界で唯一妥当な判断を下したのにその結果やられる。なんだか魔王が不憫でならないのだが。

「そう、それこそが神の使わす救世主、イボ・ノイトだ！」

こうして、タカシは最終的にそうめんのような名前の英雄に落ち着いた。

急にタカシの体を光が包み込みだす。

「もう・・・行くのね・・・・。」

そうらしい。

「元気でな、同志よ。」

お前はこれを見てもなお異世界人と信じないのか。

「また会おう！今度は平和な世界で！！！」

信号は青に変わっていた。

しかしタカシはしばらくその横断歩道の前で立ち止まっていた。倒れた自転車を起こそうともせず。

「あれ？お前にしては来るのちょっと遅くね？何かあったのか？」

「・・・・、世界を救ってた。」

「・・・・、は？」

「まあいいや。とりあえず格ゲーしようぜ。これ最近買ったばっかのやつだけどずっとやりこんでるから俺けっこう自信あんだよ。お前これ得意か？」

タカシはふと、自分が掛けているネックレスに気付き、こう言う。

「負けはしないな。」

f
i
n

最伍の伝説（後書き）

これであっさりと終了です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

最後は露骨なパロディが入りましたが個人的には入れるかどうか微妙なラインでした。
でも、これは小説を読む人のためというより漫画やアニメを見る人向けに書いた部分が大きいのでらしい感じに仕上がったのでは、とも思っています。
そもそもこれは小説ではなく漫画をひねりなく直接文章にしたもの、というのが正しいですけどね。
全5話でさらに1話1話が短いのもあまり本を読まない人向けだから？
嘘です。単に書く能力と気力が足りなかっただけです。

今後また作品を書くことがあればそのときはよろしくお願いします。

誰も見ねーよとか言うな・・・正論すぎるだろ・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5580n/

伝説の勇者（笑）

2010年10月8日16時12分発行